

歴史と
なかよく歌人の心と
響きあう

若き国守が越中国に赴任

万葉集に473首もの歌を残す歌人、大伴家持。そのうち、越中に在任中の歌が223首。

家持を感動させ、歌を詠ませた越中国と家持の思いをたどる。

奈良をはなれ、越中国へ

大伴家持は、14歳の時に父の旅人を亡くし、大伴氏の家督を継ぐ。そして、天平18年(746年)、越中の国守として赴任し、この地に5年間滞在した。

平城宮から、遠く越中国にきた家持。ここでは、奈良とは違う雄大な山や海、川など見るものすべてが新鮮だった。

国府が二上山のふもとにあり(現在の高岡市伏木)、奈良の二上山と同名であることから、越中の二上山の姿を身近に感じていたであろう。二上山に鳴くホトトギスの声を恋しく思う歌を詠んでいる。



ぼくはこの歌に
詠まれているよ

大伴家持像

「万葉のふるさと高岡」
のシンボル

像高:2m 作:米 治一

万葉集を代表する歌人、大伴家持は、越中の国守として赴任し、この地で数々の歌を詠んだ。二上山も歌にした。山頂近くに、若き日の大伴家持像がある。二上山の緑のなかで、今にも新しい歌を書き出しそうな姿。越中の自然に感動した家持の心情が伝わる像である。

玉くしげ 二上山に 鳴く鳥の
声の恋しき 時は来にけり

(たまくしげ)二上山に鳴く鳥の
声が恋しくてならない時が、
とうとうやってきた。

(巻17・三九八七)

朝床に
射水河
いみづかは

聞けば遙けし
朝漕ぎしつづ

唱ふ船人

朝の床のなかで耳を澄ますと
遠くはるかに聞こえてくる。
射水河を朝漕ぎながら歌う舟人の声が。

(巻19・四一五〇)

のどやかな越中の日々

射水河とは、現在の小矢部川のこと。

家持が暮らしていた国守館は、射水河の河口に近い高台にあったと考えられ、明治時代まで、その下を射水河が流れていた。今より水量が多く、ゆるやかに流れ、多くの船が行き来していたという。

目覚めた家持の耳に、船人の歌が聞こえる。ゆったりとした朝の風景が目に浮かぶ。



立山に 降り置ける雪を
常夏に 見れども飽かず
神からならし

立山に降り置いている雪は、
夏のいま見ても見あきることがない。
神の山だからにちがいない。

(巻17・四〇〇一)

山々に神を見る

3,000m級の立山連峰は、都から来た家持に大きな感動を与えたに違いない。真夏にも雪が溶けることがない山。それは、神だからだと、家持は歌に詠んでいる。立山(太刀山)は、現在の劔岳を中心とした一帯だという説もある。どの山であろうと、海越しの立山連峰の壮大さ、白い雪をいただく美しさは変わらない。一年中見ていても飽きない絶景である。



馬並めて いざ打ち行かな
 渋谿の 清き磯廻に 寄する波見に

馬を並べて、さあ出かけようじゃないか。
 渋谿の清らかな磯辺に打ち寄せる
 波を見るために。

(巻17・三九五四)

越中国庁跡

国守が政務を執っていた国庁は、伏木台地の高台にあったとされる。現在の勝興寺のあたりにあったと考えられ、境内には越中国庁跡の石碑がある。



▶ 詳しくはP28へ

荒波が岩に寄せる

「渋谿(しぶたに)」とは、二上山の山裾が海に入り込むあたりのことで、かつては岩の多い険しい地だったという。荒波が打ち寄せる光景を見に行こうと誘う、心が高揚する歌である。

やがて、この険しい道に義経と弁慶一行が通りがかり、雨が晴れるのを待ったことから、現在では「雨晴(あまはらし)海岸」と呼ばれている。



越中国守館跡(高岡市伏木気象資料館)

国守が暮らしていた国守館は、高台の端にある現在の高岡市伏木気象資料館あたりとされる。この場所には全国初の民間測候所として始まり、明治42年に移転した洋風木造建築が今も残る。



高岡市伏木気象資料館
 高岡市伏木古国府12-5
 TEL.0766-44-6905

ここから遥か万葉時代へ 思いを馳せる

高岡市万葉歴史館

伏木の高台に建つ高岡市万葉歴史館は、万葉集に関する本格的な施設として開館。豊富な文献や資料を揃え、研究や情報収集、教育、展示などの活動を行っている。館内には、大伴家持の生涯や越中万葉の歌を紹介する常設展示のほか、新しい視点で万葉集を見せる企画展示、万葉集に詠まれた植物が楽しめる庭園などがある。



高岡市万葉歴史館

高岡市伏木一宮1-11-11
 開館時間/午前9時～午後6時(11月～3月は午後5時まで)
 料金/一般…300円 中学生以下…無料 65歳以上…240円
 団体(20名以上)…240円
 休館日/火曜日(火曜日が祝休日の場合はその翌日)・年末年始
 ※年末年始・連休前後など開館日が変更される場合がありますので、ホームページの年間スケジュールでご確認ください。
 TEL.0766-44-5511
 ※身体障害者手帳等をお持ちの方、付添者の方が観覧するときは無料となります。(受付で手帳をご呈示ください)
 ※特別展示等を行う場合に、別料金となるときがあります。
 ※ラウンジ・図書閲覧室をご利用の場合は、観覧料は必要ありません。
 ※授乳室あり。多目的トイレにオムツ交換用ベビーシート設置。

正法寺

伏木八十八ヶ所として信仰される寺で、境内には、自然石に越中万葉歌を彫った歌碑が置かれ、万葉研究者の佐佐木信綱の筆による歌碑もある。



もののふの 八十娘子らが 汲みまがふ
 寺井の上の 堅香子の花

(もののふの)たくさんさんの少女たちが入り乱れて
 水を汲んでいる寺井のほとりに
 群がり咲いているかたかごの花。

(巻19・四一四三)



家持くん

かたかごの花



二上山 城ものがたり

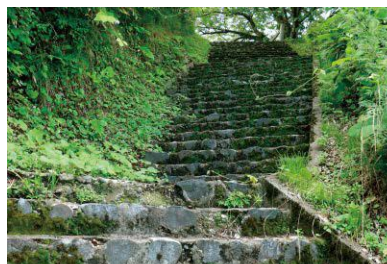
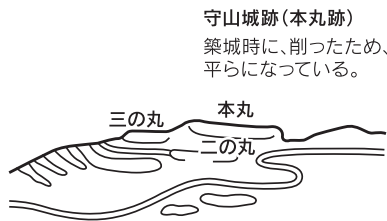
越中の国を一望する守山城

二上山の西峰には、かつて「守山城」と呼ばれる城があった。現在の城山園地の場所である。ここは、越中平野を一望する絶好の地であった。

守山城をめぐる数々の攻防

守山城は、別名二上城、海老坂城ともいう。本丸跡地に立つと、前方を小矢部川に守られ、遥か高岡、射水を見渡せる。築城の時期は明らかでないが、南北朝時代にはあったと考えられる。

戦国時代、永禄11年(1568)に、上杉謙信が越中へ侵攻し、守山城を攻めたが、一度は中断。天正4年(1576)に攻め落としている。その後、神保氏張や佐々成政が在城したが、天正13年(1585)には、前田軍が佐々成政を破り、その功により前田利長が越中三郡を与えられ、守山城を居城とした。24歳の若さであった。



本丸下から本丸への階段

守山城跡(本丸跡)
築城時に、削ったため、
平らになっている。



将来の殿を養育した城

入城した利長に、眼下に広がる越中平野はどのように映っただろうか。利長入城の翌年、利長の義兄・前田長種が城代(城主の留守中、城を守る人)となり、利長の姉・幸とともに移り住んだ。文禄2年(1593)、父利家と側室の間に男子が誕生する。利長32歳の時である。この異母弟は、前田長種と幸夫妻のもとに預けられ、守山城で養育されることとなる。この子が、後の前田家三代当主利常である。幼き日より城下の小矢部川と平野を眺めながら、長種夫妻のもとですくすくと育っていくのである。

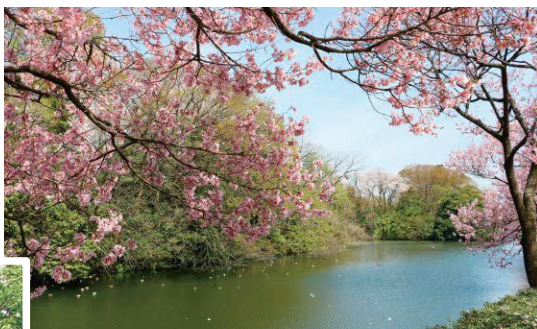
やがて役目を終えて

慶長2年(1597)、利長は富山城へ移り、大修築するが、その翌年、利家より家督を譲られ、金沢城に入城する。利長が守山城を去った後、城下の寺院や商工業者たちも次々と富山に移り、守山城の城下町はさびれていったという。慶長4年(1599)には、長種も富山に城代として移ると、守山城は使われなくなっていく。時代は、徳川の世を迎えようとしており、山城から平城へと城も変わっていったのである。そして慶長10年(1605)、利長は、この年元服した利常に家督を譲り、自身は富山城へと移った。

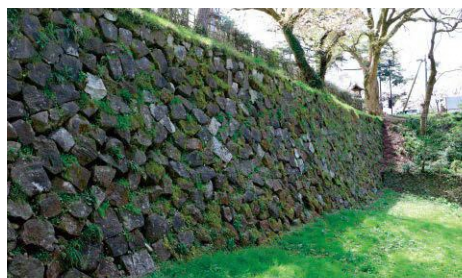
そして、 高岡城の 築城へ



前田利長像(本丸)



枅形濠



石垣(二の丸・本丸間)

新しい城を築き、町を開く

利長が隠居した富山城は、城下の火災で類焼。そこで利長は、すぐに関野の地に新しい城を築くことを決める。

そこは、かつて守山城から眺めていた地だった。越中、能登、加賀のはば中心にあり、守山城、富山城、増山城などと連携も取れる。水運がよく、北側には沼地があり、防御にも優れている。

徳川家康から許可を得た利長は、関野に城を築き、町をつくる。新しい町の名前は、「詩経」の一節「鳳凰鳴けりかの高き岡に」から引用して「高岡」と命名された。高岡城は、自然の地形を生かしてつくった壮大な城となった。

今も水をたたえる城跡

利長の死後、高岡城は一国一城令で廃城となる。しかし、前田家は土塁や堀を残し、塩蔵、米蔵を置くなど、城跡の保存に努めた。明治になり、城跡は高岡古城公園となったが、水濠はほとんど築城時の姿をとどめ、今も満々と水をたたえている。また、自然を豊かに残し、春は桜、秋は紅葉と、人びとに親しまれている。



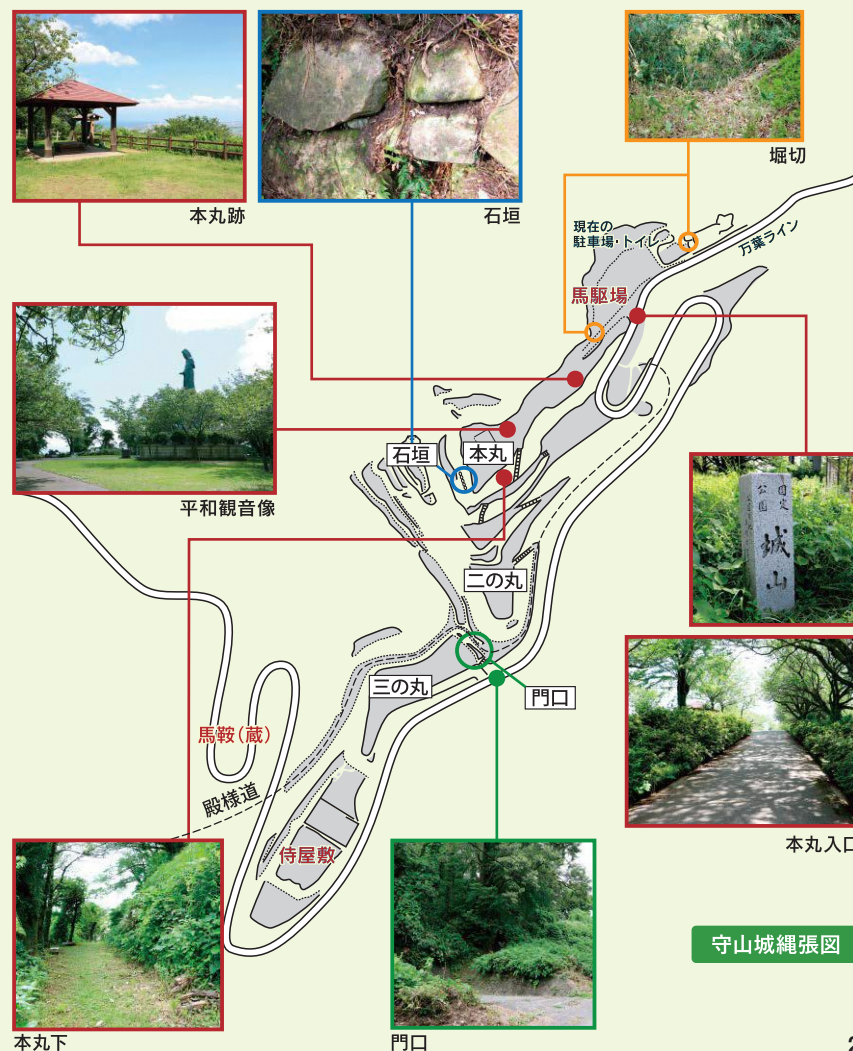
利長くん

守山城跡を探索しよう!

城山園地は、守山城の跡。お城の縄張図を見ながら散策すると、土地に残る郭のあとなど見えてくるかも。戦国時代の人々の気持ちを想像してみよう。



城山から見る高岡古城公園



ACT.3

守山城縄張図